

そのころ、カフェで始まる別のはなし

「やった」
「やってない」
「あれはやってる」

ガラス越しに街ゆく人々を眺めながら、体の関係の有無を当て合うというなんともくだらないゲームをして時間を潰す私たち。

もうすぐクリスマスだっていうのに、彼氏が居なくてクサクサする。
という友達を遊びに誘ってみたけど、機嫌は相変わらず悪いみたい。

「前言ってた、酒屋の人どうなの」
「ああ、配達の？ 彼女いたみたい。ガッカリ。」

煙草をふーっと吐いて、イルミネーションを睨みつける。

「もうこのまま相手が居なからどうしよう」
「まあすんなり結婚も出来ないしね、私たち」
「もうヤダ！ 呪ってやる！ どうせあいつも、あいつもやってるんでしょ！」

あのカップルなんて、いかにも今からって感じで歩いてる。
手がくっつくか、くっつかないかの距離。
あー初々しい。

友達は、ん、と煙草をもみ消す。

「でも私たちだってカップルに見えるかも。やってる！ って思われてるかもねー」

思わずボッと赤くなる。
「そ、そうよねー、そう思えば、この人たちもカップルってわけでもないのかもー…」

まあ私はずっとカップルになりたいと思ってたけど。
言えば友情が壊れそうで、ずっと言えないまま。

「そろそろ店戻ろうか？ ママ怒ってるかも」
「そうだね。トレー返してくるよ」

ドートルを出ると冷たい風がびゅうと吹いた。
友達は手をつないでくれる。

期待していいのかなー、
こういうプレイボーイっぽいところ、好き。

「寒いね」「うん」

でも遊ばれるのは好きじゃない。
口数少なく、私たちは2丁目の角を曲がった。